

聞き間違いに関する音韻的考察

南山大学
六川雅彦

1. はじめに

日本語学習者と日本語母語話者との日本語での会話では、日本語学習者の不正確な発音、イントネーション、アクセントなどのために、しばしば聞き間違いが起こるが、聞き間違いは日本語母語話者同士の会話でも起こる。本研究では、日本語母語話者同士の自然会話での聞き間違いを分析し、音韻的に考察する。

2. 分析

データとして「聞きまつがい」(糸井重里(ウェブサイト))からランダムに収集した99例の聞き間違い(2音節(2モーラ)から12音節(12モーラ)までの語・句・文)を採用し、分析した。その内、音韻的変化を伴わない聞き間違い(同音異義語)が4例あり、音韻的変化を伴うものは95例である。

まず、音韻的変化が起こる割合を考える。99例の語・句・文の音節の総数は504で、正しく知覚されなかった音節(何らかの音韻的変化が起こった音節で、部分的・全体的に知覚されなかった(消去された部分がある)音節27も含む)が210であった。平均すると、聞き間違いが起こる際には、発音された音節全体の41.7%の音節で何らかの音韻的変化が起こっている。また、それ以外にも、聞き間違いの際には、発音されていない音が認識される場合もあり(子音・母音(またはその両方)が挿入された音節(総数32))、それも考慮に入れると、聞き間違いが起こった語・句・文では、発音された音節全体の半分強しか、正しく知覚されていない。

次に、音韻的変化について考察する。音韻的変化があった音節数(音節の一部または全部が消去・挿入された音節を除く)は179で、その内訳は母音のみの変化49、子音のみの変化85、音節全体の変化(母音と子音の変化)45であり、子音のみの変化が全体の47.5%と約半数を占めた。

母音のみの変化が起こった音節と子音のみの変化が起こった音節を見ると、母音の変化では、[high][low]などの高さに関する変化は起こるが、[+front][-front]に関しては変化が起こっていない。このことは高さよりも[front]という素性が知覚されやすく、変化しにくいということを示している。また、子音の変化では、調音の様式または調音の位置に関する共通点を持っている。つまり、聞き間違いが起こる際には、ランダムに音の変化が起こるのではなく、何らかの共通点を持った音、いわゆる似た音との間で聞き間違いが起こりやすいと言える。

最後に、消去・挿入が起こった音節であるが、消去が起こった音節が27、挿入が起こった音節が32であった。消去が起こった音節の内訳は、母音のみの消去が9、子音のみの消去が11、音節全体の消去(母音と子音の消去)が7であり、それぞれの間に数的に大差はなかった。母音の消去では[i] (4例)、子音の消去では特殊拍の[N]と[Q] (2例ずつ)が最多であり、消去に関してはモーラという単位が深く関わっていることを示唆している。また[i]は母音の中で最も短い音であり、長さも関係しているかもしれない。同様に、挿入に関しては、母音の挿入では[a]、子音の挿入では特殊拍の[N]が最多でありモーラの関連性が窺える。また、[a]は母音の中で最も長い音であり、長さも関係しているような点でも消去との共通点が見られる。

3. さいごに

本研究では、母語話者同士の会話での聞き間違いを音韻的に考察したが、今後はそれと平行して学習者と母語話者との間での聞き間違いも分析し、両者の間の共通点と差異も研究する予定である。

参考文献

糸井重里「聞きまつがい」 <http://www.1101.com/iimatugai/index.html>

Bond, Zinny. 1999. Slips of the Ear: Errors in the Perception of Casual Conversation. Elsevier Science & Technology Books.

Fromkin, Victoria A. (ed.). 1980. Errors in Linguistic Performance. Academic Press Inc.